後漢末期の襄陽の豪族

上田早苗

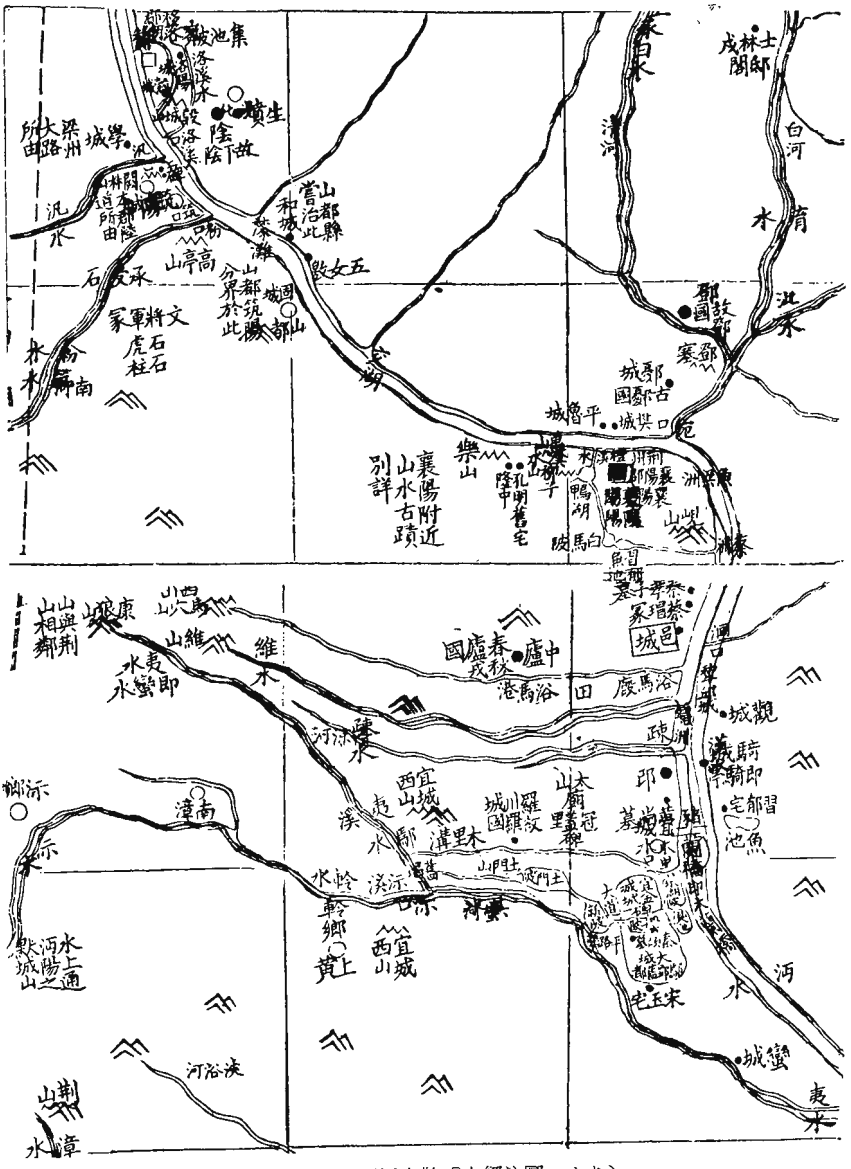
はじめに

北魏酈道元の『水經注』が歴史地理研究の上で重要な史料であることは言うまでもないことであるが、とくに本稿で取り扱う巻二十八、沔水篇の襄陽周邊の記事は、後漢末三國初の襄陽土着豪族の實態を克明に記述している點できわめて貴重である。さらに、清末民國初の楊守敬が作成した『襄陽城圖』は『水經注』の記事を明瞭に圖示してくれている（附圖Ⅰ、附圖Ⅱ參照）。附圖Ⅰは、『水經注圖』のうちの沔水（漢水）篇の一部であり、とくに本稿に必要な襄陽周邊の地域である。附圖Ⅱは、『水經注圖』巻末に附載されている歴城・鄴城・洛陽城など十三の大都市圖のうちの「襄陽城圖」と名付けられているものである。本稿はとくに附圖Ⅱを中心にして論を進めてゆきたい。

附圖Ⅱは、楊守敬が『水經注』の記事をもとにして作成したことはたしかであるが、かれがこれを作成するにあたって實地測量をおこなったかどうかは、判明しない。本稿はいちおう楊守敬の作圖に從っておく。なお、二點間の距離を示す記事には、『初學記』巻八所引東晉習鑿齒『襄陽記』（又は『襄陽耆舊傳』ともいう）[1]に、

峴山南八百步、西下道百步、有習家魚池

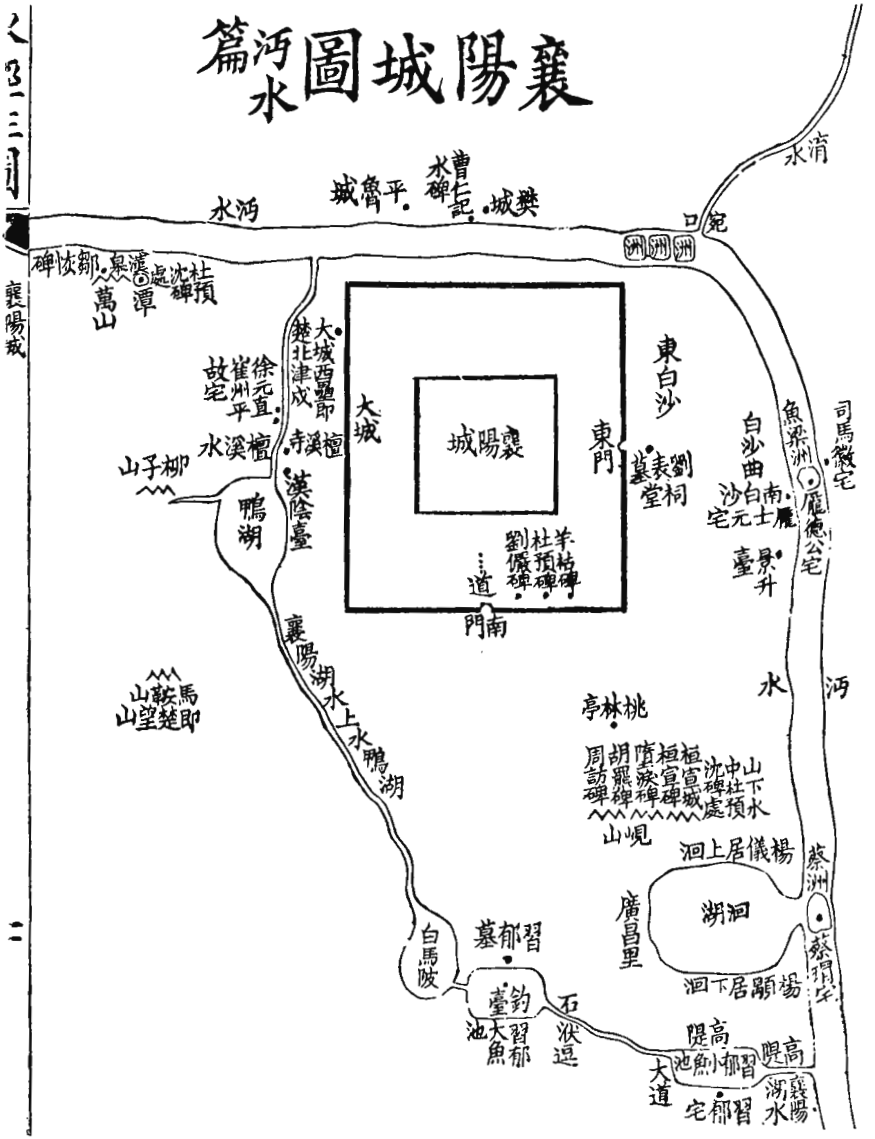
とあり、峴山と習家魚池（附圖Ⅱの習都大小魚池）との直線距離は、約千二百メートルとなるのが參考になろう。[2]


白河
水
清河
江水
汎水
石
水
汝水
襄陽附近
山水古蹟
別詳
樂山
鄧國
城
城
城

一　襄陽の地形

まず、襄陽周邊の地形を概觀してみたい（以下、附圖Ⅱを參照）。遠く秦嶺山系より源を發した沔水（漢水）は襄陽の縣城の西北でまず檀溪水を合わせる。この水は柳子山より派出し、いったん鴨湖に流入し、さらに、鴨湖より北流する。沔水はさらに東流し、樊城の南を通過し、つづいておおきく南に彎曲する。沔水が屈曲するときに、流速はいちじるしく減じ、土砂が推積される。ここに三つの砂洲が形成されるのである。この地點は宛口と呼ばれ、北方より淯水が流れ込む。淯水を溯れば、南陽（宛）に至る。宛口というのは宛に至る入口という意味であり、宛に至る起點を表わしている。沔水はさらに南流し、白沙曲を過ぎる。「曲」とは河流が屈曲する地點である。曲で水速がやや衰えるから、土砂が推積され、砂洲ができる。これが魚梁洲である。白沙曲の近邊には龐氏が居住している。沔水はさらに南流し、蔡洲に至る。蔡洲には蔡氏一族が占住している。蔡洲からは洄湖が望まれる。この湖口は細くくびれているので、水流はせきとめられ、洄湖に流れ込む水量は、それほど多くはない。ここに流れ込んできた水はゆっくりと周回し、ふたたび沔水に還る。水が常に綠色を帶びているのは、湖底が深く、また水生植物が繁茂しているからであろう。洄湖の周邊には楊氏が占據している。沔水はさらに南流し、襄陽湖水を合わす。この水は鴨湖より東南流し、白馬陂、大小の習郁魚池を經て、沔水に合流するものである。この襄陽湖水は人工的に開鑿されたものかもしれないが、詳細は明らかではない。大小の習郁魚池は、習氏の勢力範圍の北限であると推測される。沔水はさらに南流を續け、現在の武漢で江水（揚子江）に合流するのである。

襄陽地方は春秋時代には「鄀・鄀・盧・羅の地」（『水經注』卷二十八、沔水編中）であったとされる。この四國のほかに、鄧が知られている。すなわち、『左傳』莊公六年の條に、「楚文王伐申、過鄧。鄧祁侯曰、吾甥也。止而享之」とあって、鄧の祁侯と楚の文王とは姻戚關係にあった。しかし、楚鄧兩國の友好は短く、十年後に文王は鄧を滅ぼしている。



附　圖　II　（楊守敬『水經注圖』より）

中原の諸國より荆蠻として蔑視されていた楚は、文王の頃より頭角をあらわし、その勢力を蓄積していった。すでに羅・盧など江漢の小國を掌中に收め、その鋒を中原に向けようとしていた。この時期に襄陽は楚の領域に編入されたのであろう。襄陽はその位置から見てまさしく、軍事・交通上の要地であり、楚の北津戍として中原經營の前進基地とされた。楚は宛口より淯水を溯り、申・蔡などの諸國をつぎつぎと侵略していったのである。

秦の始皇帝のときに、楚は滅ぼされた。襄陽は新たに南郡北部として秦の版圖に組み込まれる。ここに襄陽は、南郡の一部として改編されたのであった。襄陽縣は楚の北津戍が中核となって發展したことはまちがいない。鄢・郢・盧・羅など小國の蠻民が諸處に散居している狀態から、楚の北津戍を經てさらに縣城へと發展していく過程は、たんに襄陽に限らず、古代帝國の成立過程を理解する上でもっとも重要な問題ではあるが、この點は別の機會に論じたい。

二　襄陽の豪族

襄陽の中心は、いうまでもなく縣城である。城內はいくつかのブロックに區劃されている。すなわち里と言われている最小の行政單位である。漢代の人々はいずれかの里に所屬していた。人々はいずれかの里に登錄されて、はじめて公民の資格を得るのである。城內は、縣衙などの行政施設、市場、居住區域たる里などによって構成され、耕地は城內に存在しなかったとされている。耕地は襄陽の城外に廣がっている。『水經注』卷二八、沔水篇中に、

（檀溪水）北逕漢陰臺西。臨流望遠、按眺農圃、情邈灌蔬、意寄漢陰、故因名臺矣

とある。漢陰臺に登って農圃を見渡すと、日々の辛い灌蔬の仕事を忘れてしまう程であると解釋できるものの如くである。この記事は、漢陰臺の附近には農地菜園が一面に展開していたことを傍證している。鴨湖は灌漑用水としても使用されていたのであろう。あるいは鴨湖の南端より派出する襄陽湖水および白馬陂の兩側の地域も、この水道を利用して縱横に灌漑用の水路が施され、肥沃な耕地が造成されていたのであろう。縣城の里內に住居している人々は、朝に襄陽の東門

または南門を出て、各自の耕地に到り農事に勤しむ。夕に人々は作業を終えて、城内の自宅に帰る。このように城内の郷里と城外の耕地を毎日往復して生活する住民とは別に、城外に本據を置き、族的結合を維持している集團がある。これらは豪族とも呼ばれる。[3] 次にこれらの豪族を紹介していくことにする。

㈠ 龐氏　龐氏の本據は白沙曲の周邊である。龐氏の一族には、龐德公（『後漢書』列傳第七三、逸民）、龐山民、龐換、龐統（字は士元、『蜀志』巻七）、龐宏、龐林らが知られている。[4] 龐德公は沔水の魚梁洲上に居住していた。かれは夫人とここで隱遁の生活を送り、自ら田土を耕作し、あるいは琴を彈し、書を讀んで悠々と日々を過していた。荆州刺史劉表がかれを執拗に辟召しようとしたが、龐德公はついに承服しなかったとある。魚梁洲より東方を望むと向う岸に司馬徽（字は德操）の居宅がある。司馬德操の方が十歳年少であって、龐德公に兄事する間柄であった。司馬德操はしばしば舟で沔水を渡り、龐德公を訪問して談合したのであった。龐山民と龐換は龐德公の子である。龐山民は襄陽に寄寓していた諸葛孔明の小姉と結婚した。のちに魏の黄門侍郎、吏部郎に就任したが、早卒したとある。[5] 龐換は西晉の太康年間に牂牁太守に任命され、のちに襄陽に歸郷したとある。[6] 住居は魚梁洲ではなく、南白沙である。[7] 魚梁洲はいわば隱逸の地であって、一般の人々は住居していなかったようである。龐氏一族の大部分は南白沙に蟠踞していたのであろう。龐德公の從子に龐統（字は士元）がいるが、かれは「士元居漢之陰、在南白沙。世故謂是地爲白沙曲矣」（『水經注』巻二八、沔水篇中）とあって、南白沙（白沙曲）に居住していたことは明白である。かれはとくに龐德公に寵愛されたとあり、のちに郡功曹に就任している。功曹は掾史の人選を管掌する「郡の右職」である。かれはのちに子の龐宏とともに、劉備―諸葛亮に附隨して四川に移住し、蜀漢政權の樹立に活躍した。また、龐宏は蜀漢政權にあっては涪陵太守となっている。[8] 龐統の弟の龐林は襄陽の豪族習禎の妹を娶った。かれは荆州治中從事となり、鎭北將軍黄權に從って、吳を征討しようとしたが、かえって吳將陸議のために敗北を歸した（二二二年）。のちに黄權とともに魏に降服し、官は鉅鹿太守に至ったとある。[9]

㈡ 楊氏　楊氏の本據は洄湖の周邊である。楊氏の一族には、楊儀（『蜀志』巻十）、楊慮、楊顒などがいる。楊慮は楊儀の兄である。楊顒はかれらの宗人とされている（『蜀志』巻十五、楊戲傳注所引『襄陽記』）。楊儀は上洄すなわち洄湖の北側に、楊顒は下洄すなわち南側に居住していた。楊儀の系統と楊顒の系統とは同じ楊氏であっても、遠縁にあたるのであろう。楊氏は幾流にも分派して、この洄湖周邊に占據していたのである。楊慮は幼少にして德行があり、江南の冠冕と稱された。州郡あるいは中央政府の三公が掾屬にと辟召したけれども、その要請をことごとく辭退したとある。學業に精厲し、門徒數百人を教授していた。おそらく楊氏の一族もかれにおおいに期待をかけたであろうが、不幸にも十七歲で夭死した。[10] 楊顒と楊儀はのちに劉備に隨行して四川に移住し、二人とも諸葛亮に信任された。すなわち楊顒は、巴郡太守、丞相諸葛亮主簿、東曹屬を歷任した。[11] 楊儀はなかなかの野心家であったようである。かれはとくに諸葛亮に信任されて、丞相參軍、丞相府長史、綏軍將軍に任命されている。建興十二年（魏の青龍二年）に諸葛亮に從軍して渭南に赴き、魏の司馬懿と對陣した。諸葛亮が軍中で死去すると、かれは自ら蜀軍を領して成都に歸還し、ライバルの魏延を誅した。かれは諸葛亮に代って蜀漢政權を掌握しようとしたらしい。しかし、重臣たちの忌避するところとなり、排斥されて庶民に落された。漢嘉郡に流刑され、のちに自殺した。

㈢ 蔡氏　蔡氏の一族は蔡洲に占住している。その中心人物は蔡瑁である。『太平御覽』巻六九所引『荆州圖經』には、

襄陽縣南八里峴山東南一里江中有蔡洲、漢長水校尉蔡瑁所居。宗族強盛、共保蔡洲

とあり、あるいは『水經注』巻二十八、沔水篇中朱謀㙔箋所引『襄陽耆舊傳』に、

蔡瑁字德珪。性豪自喜、少爲魏武所親。（蔡）瑁家在蔡洲上。屋宇甚好、四墻皆以青石結角。婢妾數百人、別業四五十處

とあり、豪族蔡氏の實態が適切に表現されている。屋宇は華麗であり、數百人の婢妾を擁し、別業は四五十箇所にも及んでいた。建安十三年（二〇八）に曹操が襄陽を攻擊したあと、曹操は蔡洲の蔡瑁の私室をわざわざ來訪したとある。「少

くして魏武（曹操）の親じむところと爲る」とあるごとく、曹操とは「故舊」という私的な關係もあって、蔡瑁は長水校尉という高官をも獲得したのであろう。後漢末魏初は、蔡氏の全盛期であったようで、蔡諷の娣すなわち蔡瑁の伯母は太尉の張溫に嫁いでいたし、蔡瑁の長姉は黄承彦の妻である。黄承彦は沔南の名士とされ、かれの女は諸葛亮の妻である。[18] 蔡瑁の少姉は、劉表が荆州刺史として當地に着任したあと、かれの後妻になった。もともと劉表は長子の劉琦を寵愛したが、蔡氏が壓力を加えてかれを排除してしまい、蔡氏と結託した劉琮を劉表の後繼者とせざるを得なくなったことは著名な事實である。[19] 蔡氏の子孫は魏・西晉を通じて富強を誇り、宗族は洲上に繁衍した。しかし、永嘉末の混亂期に草賊の襲擊に會い、全滅に歸したとされる。

㈣　習氏　習氏の勢力はかなり廣範圍に及んでいる。『水經注』卷二八、沔水篇中に、

沔水又東南逕邑城北、習郁襄陽侯之封邑也、故曰邑城矣

とあり、酈道元の説に從えば、習郁が襄陽侯として邑城（附圖Ⅰ參照）に封建せられたとある。習郁は後漢初期の人物であって、『藝文類聚』卷四九所引『襄陽耆舊傳』に、

習郁爲侍中時、從光武幸黎丘、與帝通夢見蘇山神。光武嘉之、拜大鴻臚、錄其前後功、封襄陽侯。使立蘇嶺祠、刻二石鹿、俠（『太平御覽』卷九〇六所引『習鑿齒襄陽記』作夾）神道。百姓謂之鹿門廟。或呼蘇嶺山爲鹿門山

とあって、光武帝劉秀のもとにあって侍中として活躍したらしい。光武帝はその功績によって襄陽侯に封建したとある。しかしながら、『續漢書郡國志』の荆州南郡襄陽の條項には、侯國の存在に關する記述は見當らない。『襄陽記』（または『襄陽耆舊傳』ともいう）は東晉の習鑿齒の著作であるが、かれは自己の祖先をかなり粉飾しているかも知れない。もっとも光武帝劉秀の故郷である南陽には、淯水を溯ればすぐさま到達できるから、劉秀の擧兵のあと、ただちに劉秀集團に參加したであろうことは想像に難くない。

「宗族は富盛にして、世々鄕豪たり」（『晉書』卷八二、習鑿齒傳）と稱せられる習氏の勢力範圍は、邑城を中心として

とにかく北は習郁大魚池—習郁小魚池附近にまで達しており、この附近がほぼ北限であったと推定される。大小の魚池は開鑿者に因んで、習郁大魚池、習郁小魚池と呼び慣らわされている。この魚池の所有權はおのずと判明し、悶着の發生を防止する。この二つの魚池は襄陽湖水の水道を南北に擴張したものであろう。大池は東西六十歩（八八メートル）、南北は四十歩（五九メートル）の方形である。池中には釣臺があり、池側には松篁が列植されている。大池の東端には石製の洑逗（？）が配置され、池水を小池に送り込む。小池は東西七十歩（一〇二メートル）、南北二十歩（二九メートル）である。池の隄には楸と竹とが夾植され、池の中には蓮と茨とが生い茂っている。大小の魚池の本來の用途はいうまでもなく魚類の養殖である。とくにこの大池は習郁が范蠡の養魚法に準據して掘鑿したとある。さらに「諸習氏荆土豪族有佳園池」（『晉書』卷四三、山簡傳）とあり、習氏ばかりではなく江南荆土の豪族ならば自家の池を所有していたとされる。もちろん、池はしばしば遊宴の會場として利用されるのであるが、同時に魚類が養殖されていることを見逃してはならない。ここで養殖された魚類は、まず豪族の一族内部で消費され、余剰があれば、襄陽などの都市の住民に販賣されたのであろう。

襄陽の西方にあたる萬（万）山および東南にあたる峴山の澤中にも水魚がいた。ところがこの二山はいつしか禁漁區に指定されているのである。すなわち、『晉書』卷六六、劉弘傳に、

舊制峴・方（万の誤）二山澤中、不聽百姓捕魚。（劉）弘下教曰、禮名山大澤不封、與共其利。今公私并兼、百姓無復厝手地。當何謂邪、速改此法

とある。劉弘は西晉惠帝の太安二年（三〇三）より永興二年（三〇五）まで鎮南將軍・都督荆州諸軍事・荆州刺史として襄陽に赴任した。當地には舊制として百姓が峴山・萬山の魚類を捕獲することを禁止しているのである。おそらく、この二山はもともと襄陽住民の入會地として承認されていたのを、豪族が協定して禁漁區にしてしまったのではあるまいか。このために、襄陽の住民は豪族が養殖または汚水より捕獲した魚類を購買することを余儀なくされ、豪族の貨殖の餌食と

なったのである。劉弘が着任して、ようやくこの舊習が解かれたのであった。

三　豪族の性格

前章では、襄陽の豪族すなわち龐氏、楊氏、蔡氏、習氏を概觀してみた。龐氏は白沙曲の周邊に居住し、楊氏は上洄と下洄とに分布している。また蔡氏は蔡洲全域に占住し、習氏の領域は邑城を中心として廣範圍に及んでいる。これらの豪族は各々かなりの空間的なひろがりをもって居住しているのである。この現象は何も襄陽の豪族に限らない。およそ、豪族であればあるほど幾流にも分れて繁榮し、その宗族の人員は增大する。同姓の九族あるいは五族を含む宗族が數里あるいは一鄕にくまなく占住することになるのである。數十家あるいは數百家ともなれば、これらの世帶が密集していたとしても、かなりの面積を想定せざるを得ないであろう。その外郭にはこの豪族の社會的經濟的支配下にある異姓の農民が附着する。豪族とは、大規模な同族集團を中核とし、その大きさに比例して、支配下にある異姓の小農民も擴大していく。王莽末とか後漢末の混亂期になれば、數十家あるいは數百家を單位とする自衞集團が頻繁に出現する。これらの集團は、豪族による自律的秩序體制が、混亂期に際會して、そのままそっくり自衞集團に轉化したものである。自衞集團を構成する數十家あるいは數百家の大半は同姓の一族なのである。このほか賓客や奴婢、近邊の異姓の農民、流民などが加わる。

ところで、宗族の內部を職業別に見るならば、官僚、掾史、學者、農民、商人など種々雜多の族員が混合して成立している。甚しきに至っては、襄陽の龐氏に見られるごとく、その內部に逸民をも包含する場合もあり得る。宗族の大部分は、いうまでもなく農業に從事しているのである。

宗族の內部に貧富の差が確認できることは當然である。たとえば、濟陰郡成陽縣高相里の豪族仲氏を例證として揭げてみよう。仲氏の一族は都鄕高相里のおそらくほぼ全域に占住していた。仲氏の本據の近隣に帝堯廟がある。この帝堯廟は『漢書地理志』、『續漢書郡國志』にも記載されている由緒ある廟である。後漢桓帝の永康元年（一六七）に當地に赴任

してきた濟陰太守孟郁が管内の視察の折に、この帝堯廟に參詣したところ、たちまち膏雨を得たとある。この靈驗あらたかな帝堯の靈に感謝して、孟郁は成陽令呂亮や土着豪族の仲氏と協議して帝堯廟の大殿を修繕することにした。とくに仲氏は大殿前部の石礫・階陛・欄楯を擔當したとある。仲氏の一族はこの土木工事にあたって宗族がたがいに醵金したようで、その記事に「仲氏宗家、共作殿前石礫階陛欄楯。貧富相扶、會計欣懽。不謀同辭、錢應時卽具。招工募石、燿然俱至。各進琦巧、不日成之」（『隸釋』巻一、濟陰太守孟郁脩堯廟碑）とある。ここの「貧富相い扶く」とあるのは、仲氏の内部の事情を示しており、一族内部に貧富の差が存在していたことは明らかであろう。[14]

さらに魏晉以降のこのような事例を掲げてみたい。まず第一に著名な阮咸・阮籍らの所屬する阮氏を擧げねばならない。阮氏の本籍は陳留郡尉氏縣であるが、後漢末魏初に一族より中央の官僚を輩出するにともなって、その一部が洛陽の東南に移住したらしい。すなわち『水經注』巻十六、穀水篇に、「穀水又東、轉屈而東注、謂之阮曲、云阮嗣宗（阮籍）之故居也」とある。阮氏に關しては、『世說新語』任誕篇に、

阮仲容（阮咸）・步兵（校尉）（阮籍）居道南、諸阮居道北。北阮皆富、南阮貧。七月七日、北阮盛曬衣、皆紗羅錦綺。仲容以竿挂大布犢鼻褌於中庭。人或怪之。答曰未能免俗、聊復爾耳

とある。これは阮曲における逸話であろう。阮氏は道路を夾んで南阮氏と北阮氏とに分れて居住していた。北阮氏は富裕であるのに對して、阮咸・阮籍らの屬する南阮氏はきわめて貧乏であったとされる。あるいはまた、『世說新語』文學篇注所引『王隱晉書』に

〔皇甫〕謐字士彥、安定朝那人。漢太尉嵩曾孫也。祖叔獻、灞陵令。父叔侯、擧孝廉。謐族從皆累世富貴、獨守寒素

とある。安定郡朝那縣の名流である皇甫謐の「族從は皆な累世富貴」であるが、皇甫謐のみは獨り寒素を守り、「居貧、躬自稼穡、帶經而農」（『晉書』巻五十一、皇甫謐傳）とも記されている。ただし、この皇甫謐の行爲はきわめて意圖的であり、清貧に甘んじて學問に專念せんとするものである。後漢の桓帝以降、とくに在野の學者たちによって「清」の生

活理念が吹聴され始めた。「清」とは「高にして狷ならず、潔にして介ならず」と定義される。「高」とは世俗から超越していることであり、「潔」とは、世俗の塵埃を被っていないことである。豪族の一部は、かれらの本據よりやや離れた場所で學業に專念し、官僚の地位を代々世襲していくのである。襄陽の豪族龐氏の本據は白沙曲である。ところが龐氏の一員たる龐德公は魚梁洲に隱棲している。かれは范曄の『後漢書逸民傳』に登場する代表的な逸民である。荆州刺史の劉表が執拗にかれを辟召しようとしたが、ついに屈服しなかったとある。「逸民」と「清」なる生活との相違は、「逸民」が「高」「潔」を竪持し、けっして妥協しないのに對して、「清」は「高」であるけれども「狷ならず」、「潔」であるけれども「介ならず」とされ、かたくななまでに「高」「潔」を徹底させる必要はない。その妥協點が實は清官なのであるが、この問題は別稿にしるす。[15]

漢代にあって、豪族が自己の土地を小作または假作させるというのは、まず宗族內部の族員が對象とされ、ついで外郭の多數の異姓の農民あるいは流民にも及んだのであろう。宗族內部は、血緣的關係ばかりでなく、宗族間に債務關係など種々の關係が複雜に交錯していた。從って、宗族全體が融和し、內紛も發生しないというようなことは稀少であったろう。襄陽の龐氏・習氏を詳細に檢討してみると、そのまま當地に在住して魏朝政權の支配を受けたものと、襄陽を捨てて、劉備—諸葛亮に追從して四川に流入したものとがある。かかる宗族の分裂は、普段の宗族內部の緊張狀態の結果によるものであろう。

豪族は多數の宗族員と異姓の農民を包含し、一箇の自律的秩序を形成している。國家權力はこの自律的秩序をいかなる方法で掌握しようとしたのであろうか。いったい、宗族のどの部分を權力機構に吸收しようとしたのであろうか。漢代では、儒敎が政治の理念とされ、人々は日常の生活の隅々にまで儒敎的イデオロギーに規制されることとなった。官僚あるいは掾史に任官せんとすれば、まず儒敎的規範を實踐することを要求される。當時のもっとも普遍的な選擧科目は「孝廉」であった。とくに「廉」を實行せんとすれば、財富に對して淡白でなければならない。そこで、私財を宗族あるいは

さらに近邊の貧民に分配する。この散財に對して必ずと言ってよい程に「鄉里美稱す」とされ、その行爲は稱讃の對象となる。ここで注意すべきことは、「鄉里」の實質である。前述したごとく、豪族であればあるほどその宗族は膨脹し、數里あるいは一鄉に蔓延している。この散財を美稱する「鄉里」とは、その太半が同姓の宗族なのである。散財は、同族內部の鰥寡孤獨を扶養し、また經濟的に困窮した族員の破產防止に効果があり、公的權力側としてもおおいに勸奬すべき行爲である。そこで、太守が、かれを中央政府に推薦するなり、または郡縣の掾史に登用するのである。さらに里魁には數名の同姓の族員が選出され、里民（宗族）を監督する。數里を占據する豪族にあっては、里魁のみならず、有秩、三老、游徼の鄉官にも同姓の族員が選出されることになる。少數の宗族員がこのような形態で公權と接觸することにより、豪族全體も國家權力の枠中に包攝され得るのである。しかしながら、「鄉擧里選」と結合したこの方式は、國家權力側が期待したところで、かならずしも豪族が承服するとは限らない。豪族がもしこれを無視して、宗族のうちの富強のもののみが宗族全體を統率することに固執するならば、かかる豪族は反社會的勢力として國家の規制より逸脫することにならざるを得ないのである。

四　襄陽豪族の政治的動向

古來より襄陽は交通・軍事の要衝であった。それにも拘らず、前漢・後漢時代の襄陽の動向は曖昧模糊としている。後漢末期に及んで、襄陽は俄かに活氣づいてくる。その理由は、劉表が荊州の州治を武陵郡漢壽縣より當地に移轉したためである。當時の江南地方は、袁術と同盟した孫堅が、荊州刺史王叡・南陽太守張咨を殺害して後漢王朝に反旗をひるがえし、江南に獨立政權を樹立せんとした。そこで中央政府より王叡の後任として劉表が派遣され（初平元年、一九〇）、孫堅を牽制せんとした譯である。かれが荊州刺史として、荊州武陵郡に赴任しようとしたところ、すでに現地は零桂の蠻族あるいは宗賊の蜂起によって混亂しており、しかも、袁術が魯陽に駐屯して行く手を遮っていた。そこで、止むなく宜城

にとどまり、土着豪族の援助を要請せざるを得なかったのである。

さて、劉表が宜城に至ると、さっそく蒯越・蒯良・蔡瑁らに對策を檢討させている。蒯越・蒯良は南郡中廬の人である。[16] 蔡瑁は前述したごとく、襄陽蔡洲に居住する豪族である。かれら三人は、まず宗賊を平定することを進言した。すなわち、『後漢書』列傳第六四下、劉表傳に、

〔劉表〕乃使〔蒯〕越遣人誘宗賊帥。至者十五人、皆斬之而襲取其衆。唯江夏賊張虎・陳坐擁兵據襄陽城。〔劉〕表使〔蒯〕越與龐季往譬之、乃降。江南悉平

とあり、蒯越に命じて宗賊の首魁に使者を派遣してこれを誘殺し、その餘衆をも併呑したとある。さらに襄陽城内に立て籠る賊に對しては、蒯越と龐季とを遣わして降服を說得させている。この龐季なる人物は、襄陽白沙曲の豪族龐氏の一員であると斷定してまずあやまりはないであろう。かくして、江南はようやくにして治安が回復する。

劉表が荆州刺史として現地に赴任したところで、豪族たちの協力がなければ宗賊の反亂を鎭壓することは出來なかったであろう。豪族による全面的な協力によってこそ、はじめて可能とされたのである。襄陽はやや小康狀態となり、ここに州治が設置される。元來、荆州の州治は武陵郡漢壽縣に置かれていたが、當地はすでに蠻族の蹂躪するところとなり、とうてい武陵を維持することは困難であった。このために、劉表は武陵を斷念し、襄陽を州治となすことを余儀なくされたのである。

劉表は襄陽の豪族たちの支援をもって、宗賊を平定し、辛うじて荆州刺史としての面目を保つことが出來た。かれは、さらに州治を充實せんとして人材を求めようとした。かれが當地の人物を知ろうとすれば、襄陽の鄕論を利用するのが本道である。襄陽の人物批評を行う中心人物は司馬徽（字は德操）であったらしい。かれはもともと潁川陽翟の出身であって、襄陽に寄寓していた。[17] かれの居宅は、魚梁洲の東岸にあり、龐德公とは親友であったことは前述した。かれの事蹟を詳細に論ずることは出來ないが、とにかく龐德公とおなじく隱逸的な學者であったことはまちがいない。[18] かれは「清雅

にして人を知るの鑒あり」（『蜀志』巻七、龐統傳）とあり、また龐德公のかれに對する批評は「水鏡」[19]とある。「水鏡」とあるのは、つまり對象を忠實に寫すことが出來ること、すなわち人物を公正に評價できるという意味であろう。官吏の任免は鄕里の人物批評を基準にしてなされるのであるから、その人物批評は公明正大でなければならない。ところが、襄陽の場合にでも明らかなごとく、複數の豪族が並存して、その勢力を競い合っている。豪族にとって公權との接觸は、自己の勢力を擴張していくうえに、きわめて有利である。從って、鄕里の人物評價すなわち鄕論は、豪族の利害と密接に絡み合っており、まことに虛々實々であったと想像される。豪族の對立關係が激しければ、鄕論は著しく歪曲されがちであったろう。このような場合に、中立的な調停者が是非とも要求される。この意味において隱逸の學者はうってつけの人物とすべきであろう。もともと司馬徽は襄陽土着のものではないから、豪族の情實に左右されることは稀薄であり、その人物評價はいちおう尊重されたであろう。かくして、劉表はかれの紹介により、龐德公の名聲を耳にしたのであった。劉表はさっそく龐德公を辟召したけれども、しかし龐德公は何度もかれの要請を拒絶したのであった。[20]

襄陽より沔水（漢水）を上れば、四川盆地に到るし、沔水を下れば江南に到る。あるいはまた、淸水を溯っていくと、南陽を經由して河南地域に及ぶ。襄陽はまさしく天下無雙の要衝の地であった。この地をめぐって、幾度も爭奪戰が繰り返されたのは當然であった。まず、ここを狙ったのは孫堅である。『吳志』巻一、孫破虜討逆傳に、

初平三年、〔袁〕術使〔孫〕堅征荊州擊劉表。〔劉〕表遣黃祖逆於樊鄧之間。〔孫〕堅擊破之、追渡漢水、遂圍襄陽。單馬行峴山、爲〔黃〕祖軍士所射殺

と記されている。孫堅は袁術の命を受け、劉表を攻擊してくる。孫堅は黃祖を退走させ、ついで漢水を渡り、襄陽城を包圍した。しかし、孫堅は襄陽城南の峴山で射殺され、このために一軍は總崩れとなり、江南に退却することになる。

劉表は、後漢の獻帝よりあらためて鎭南將軍・荊州牧に任命され、襄陽に一箇の軍閥を形成するに至った。これより以後およそ十年間ほどは、襄陽はなにごともなく、時が流れたのであった。國內各地が未曾有の混亂に陷ったにも拘らず、

荆州のみは秩序が維持され、荒廃した洛陽宮室の修理のために勞力を提供する餘裕もあった。[29] 中原あるいは關中の戰亂を逃れて、當地に避難してくるものがあとを絶たず、關中のものだけでもその數は十萬餘家にも及んだとある。[30]

劉表はいわゆる「八及」または「八顧」の一人に數えられている。劉表は當地に學校を開立し、ひろく儒士を求めたこともあって、かれを思慕して寄留するものも多く、「士之避亂荆州者、皆海內之儁傑也」(『魏志』巻二十一、王粲傳)という評判さえ得た。一時であったにせよ、劉表の賓客あるいは屬僚として處遇されたものは、賈詡(武威古藏の出身)、文聘(南陽宛)、劉望之・劉廙(南陽安衆)、王粲(山陽高平、劉表の師である王暢の孫。なお、王暢は「八俊」の一人である)、王凱(王粲の族兄)、桓階(長沙臨湘)、和洽(汝南西平)、杜襲(潁川定陵)、繁欽(潁川)、趙儼(潁川陽翟)、裴潛(河東聞喜)、梁鵠(安平)、禰衡(平原般)、伊籍(山陽高平)、韓嵩(義陽)、鄧羲(章陵)、趙戩(京兆長陵)、竇輔(三君の一人である竇武の孫)、諸葛玄(琅邪陽都)、黄忠(南陽)、向朗(襄陽宜城)、潘濬(武陵漢壽)など錚錚たる海內の名士が含まれている。[31] 當時の劉表政權の狀況を、曹操のブレーンであった孔融は次のように記述している。すなわち、『後漢書』列傳第六十、孔融傳に、

是時荆州牧劉表不供職貢、多行僭僞、遂乃郊祀天地、擬斥乘輿、詔書班下其事。(孔)融上疏曰、竊聞領荆州牧劉表桀逆放恣、所爲不軌、至乃郊祭天地、擬儀社稷。雖昏僭惡極、罪不容誅、至於國體、宜且諱之……。案(劉)表跋扈、擅誅列侯、遏絶詔命、斷盜貢篚、招呼元惡、以自營衛、專爲羣逆、主萃淵藪

とある。「郊祭天地、擬儀社稷」には多少の誇張があるにしても、劉表の旺盛な獨立の氣概が窺われ、じじつ、かれは數千の軍艦と數十萬の兵士を畜わえて、周圍を威壓していたのである。[32]

建安六年(二〇一)に、劉備が關羽・張飛などとともに劉表の許に避難してきたことにより、襄陽には波亂が生じる。劉備は「官渡の戰」に大敗した袁紹に見切りをつけて、荆州の劉表に身を寄せることにしたのである。劉表はかれを上賓として待遇する。劉備を受け入れたことは、とうぜん曹操と敵對關係を生じさせることになる。曹操が袁紹と結んでいた

劉備の追跡を口實にして襄陽を攻撃してくることはもはや時間の問題であった。

劉表集團を構成していたものは、大別して二種に分類できる。第一は、蔡氏、龐氏など襄陽の土着豪族である。第二は、王粲、和洽、裴潛など襄陽に寄寓しているものたちである。劉表が幕下におおくの逸材を擁しながら、かれらの能力を充分に發揮させることが出來なかったのは、「〔劉〕表雖外貌儒雅、而心多疑忌」という性格上の缺陷もさることながら、土着豪族の勢力があまりにも強すぎたからであろう。このために、寄寓者の活躍する餘地は全くなく、劉廙、和洽、裴潛などは劉表政權に對して不滿を抱き、荆州を離れてしまうのである。劉表集團を動かしていたのは、言うまでもなく土着豪族である。劉表は土着豪族に依存して、その地位を維持していた。襄陽の治政を切り回していたのは、まず蔡洲の蔡氏を擧げねばならない。蔡瑁は、宗賊の反亂を平定した功勞者であり、その功績は無視できない。劉表の後妻は蔡瑁の少姉である。もともと劉表は長子の劉琦を寵愛していたが、蔡氏からの壓力がかかって、劉琦は排斥されてしまう。この間の事情は『群書治要』卷四六所引『魏文帝典論』に詳しい。劉琦は江夏太守に任命され、遠く襄陽から退けられる。劉琦に代って蔡氏と結託した劉琮が劉表の後繼者となる準備が整えられたのである。劉表が危篤と聞いて、劉琦ははるばる江夏より馳せつけてくる。しかし、蔡瑁は、劉琦が父の劉表に面會するのを拒絶した。これは、劉表劉琦父子が對面すれば、おのずと肉親の情が起り、劉琦に後事を託するかもしれないと恐れたからであった。

建安十三年（二〇八）七月、劉表危篤の情報を得た曹操は、南下して襄陽を攻撃してくる。八月にはついに劉表が病死し、劉琮が正式に後嗣となった。一方、曹操の軍は新野に駐屯した。この時點で、劉琮は使者を派遣し、なんら抵抗することもなく曹操に降服する。なにゆえに、いとも簡單に歸服したのであろうか。おそらく、蔡瑁が劉琮に降服を促したのであろうと想像される。第二章で述べたことく、曹操と蔡瑁とは「故舊」の間柄である。劉琮は蔡瑁の言いなりになって、降服したのであろう。一段落つくと、曹操はわざわざ蔡瑁の私室を訪問したとある。

劉琮は曹操に服從し、襄陽は新たに曹魏の版圖に編入された。また、劉表の幕僚であったものも魏政權に吸收され、韓

嵩は大鴻臚に、蒯越は光祿勳に、劉先は尚書令に、鄧羲は侍中にという具合にそれぞれ登用されたのである。しかしながら、襄陽の住民のすべてが曹操に吸收されたのではない。別に曹操に反抗する一派があった。この一派の中心人物は劉備—諸葛亮である。劉備はこのとき樊城に駐屯していたが、劉琮はかれになんの連絡もせず、曹操に降伏の使者を派遣したのであった。事情を知らされぬ劉備は、曹操の大軍が宛に到達したと聞いて、あわてて退却したのであった。この事實からみて、劉琮—蔡瑁にとって、劉備—諸葛亮の意向などは全く眼中になかったと判斷される。かの諸葛亮も餘程立腹したと見え、劉備に劉琮を攻めるようにすすめている程である。かれら劉備—諸葛亮は襄陽から締め出された恰好となり、さらに南方に後退することを余儀なくされたのである。劉備たちは夏口にまで奔走し、ここで劉琦と合流した。襄陽を平定した曹操は、劉備—諸葛亮を追討せんとして、さらに南下する。そこで止むなく劉備—諸葛亮は孫權と同盟してこれを阻止しようとした。これが有名な「赤壁の戰」である。曹操は關羽の奇略によって大敗をきっした。とりあえず曹操は曹仁を江陵に、樂進を襄陽に駐屯させて、軍を引き上げさせた。

襄陽地區は、曹魏が完全に制覇し、秩序が維持された。劉備、諸葛亮はふたたびこの襄陽の地を踏むことはなかった。かれらは、戰力を南方に集結し、武陵、長沙、桂陽、零陵を次々に掌握していった。やがてこれら新領土の歸屬をめぐって劉備と孫權とは對立する。建安二十年（二一五）になって和議が成立し、湘水を境界とし、長沙・江夏・桂陽以東は孫氏に、南郡・零陵・武陵以西は劉備に所屬することとなった。この和睦成立ののち、劉備—諸葛亮は本據を四川盆地に移すべく、巴蜀に向っていったのである。

最後に、この時期の襄陽の土着豪族の動向をのべて締め括りとしたい。

㈠　龐氏　龐氏の一族で劉備—諸葛孔明に從って四川に流移したものがいる。すなわち、龐統（字は士元）である。かれは同族の龐德公に寵愛されたとある。この龐德公は諸葛亮と親交があり、かれの實子である龐山民は孔明の小姉を娶っている。したがって、龐統は孔明とも交際があり、かれとともに巴蜀に移住することになったのであろう。しかしなが

ら、龐山民はそのまま襄陽白沙里に在住している。すなわち、『蜀志』巻七、龐統傳注所引『襄陽記』に、

〔龐〕德公子山民、亦有令名。娶諸葛孔明小姉。魏黄門吏部郎、早卒

とあり、山民は襄陽にあって曹魏の支配を受け、黄門侍郎、吏部郎に登用されている。

㈡ 楊氏　楊氏の族員楊儀は、『蜀志』巻十、楊儀傳に、

建安中、爲荆州刺史傅羣主簿。背〔傅〕羣而詣襄陽太守關羽。〔關〕羽命爲功曹、遣奉使西詣先主。先主與語、論軍國計策・政治得失。大悅之。因辟爲左將軍兵曹掾

とある。この記事に従えば、楊儀は建安十三年（二〇八）に曹操が襄陽を制覇してよりずっと曹氏に歸順し、建安二十一・二年頃に荆州刺史傅羣（在任期間は建安二十一～二年）の主簿に辟召せられた。刺史の主簿はけっして惡い待遇ではない。しかし、楊儀はこれを棄てて關羽のもとに走ったとある。なにゆえに曹魏を斷念して、關羽側についたのか。この點に關して『蜀志』は何も語っていない。しかし、想像できることは、蔡氏の壓迫であろう。楊氏に隣接する豪族蔡氏は、蔡瑁が長水校尉として中央政界に進出し、また蔡洲の一族は繁榮を極めている。なにかと蔡氏は公權を背景にして楊氏を壓迫したのではなかろうか。このために、楊儀、楊顒らはたえきれずして、關羽の援助を求めようとしたのであろう。

㈢ 習氏　習氏の一族は、劉備―諸葛亮側に加擔したようである。まず、習禎―習忠―習隆の三代は、『蜀志』巻十五、楊戲傳注所引『襄陽記』に、

習禎有風流、善談論、名亞龐統、而在馬良之右。子忠亦有名。忠子隆、爲步兵校尉、掌校祕書

とある。習禎の妹は襄陽南白沙曲の龐統の弟の龐林のもとに嫁いでいた。習禎―習忠父子の態度は判明し難いが、習禎の孫にあたる習隆は巴蜀に移住し、步兵校尉に就任している。

また、習氏の一族の習珍に關しては、『太平御覽』巻四一七所引『襄陽記』に、

劉備以習珍爲零陵北部都尉。孫權遣潘濬討〔習〕珍。〔習〕珍帥數百人、登山自將。〔潘〕濬乃單將左右、自到山下交語。〔習〕珍謂曰、我必爲漢鬼、不爲吳臣矣。〔潘〕濬攻〔習〕珍圍守月餘、糧箭並竭。〔習〕珍謂群下曰、珍受漢中王厚恩、不得不報之以死。諸君何爲者耶。乃伏劍自裁

とある。孫權は關羽を討伐せんとして潘濬を派遣した（建安一九年、二一四）。まず、潘濬は手初めに習珍を血祭りにあげようとする。これに對して習珍は「我は必らず漢鬼となるとも、吳臣にはならじ」と稱し、日頃の劉備の厚恩に死をもって報じたのである。習珍は劉備を漢朝の正統を嗣ぐものと看做していたのであろうか。東晉時代に「四海」に名だたる習鑿齒があらわれ、『漢晉春秋』を編纂した。本書はすでに散逸しており、わずかに清の黃奭、湯球、王仁俊の輯本によってその一端を知ることができる。ただ、その全體的な構成に關しては、『晉書』卷八二、習鑿齒傳に、

是時〔桓〕溫覬覦非望。〔習〕鑿齒在郡、著漢晉春秋、以裁正之。起漢光武終於晉愍帝。於三國之時、蜀以宗室爲正。魏武雖受漢禪、晉尙爲篡逆。至文帝平蜀、乃爲漢亡、而晉始興焉。引世祖諱・炎興而爲禪受、明天心不可以勢力強也。凡五十四卷

とある。『漢晉春秋』は三國のうち、劉備の建てた蜀漢を漢朝を嗣ぐ正統な王朝とする點においてきわめて特異な史書である。かれはまた文帝（司馬昭）が蜀漢を滅ぼした時を以って漢がいちおう滅亡したと考えるが、蜀漢の最後の年號である炎興と世祖司馬炎の諱とを引用して、晉が漢朝の火德を禪受した王朝と觀念していたのである。いったいなぜに習鑿齒はかくのごとき史觀を考え出さねばならなかったのか。それは、かれがあくまでも三國時代の自己の祖先たちの行動を正當化しようとしたためであろう。習鑿齒は蜀漢の劉備のために活躍しあるいは殉死した習隆、習珍など自己の祖先を顯彰する意圖で、あえて蜀漢を正統とせざるを得なかったのである。習鑿齒は、かれが安西將軍・都督荆司雍梁寧益諸軍事・荆州刺史桓溫に辟召され、刺史從事、西曹主簿、別駕を歷任し、また帝位を窺う桓溫を諫言したこと、襄陽の檀溪寺の道安と交際のあったこと、王獻之より「非類」とされ、同坐を拒否されたことなどいろいろ話題の豐富な人物であるが、詳

しくは後考を期したい。

註

① 『襄陽耆舊傳』（または『襄陽記』）は東晉時代の襄陽の豪族習鑿齒の著作である。原本はすでに散逸しているが、斷片は、『後漢書』章注、『三國志』裴注、『世說新語』注、『文選』注、『水經注』、『北堂書鈔』、『藝文類聚』、『初學記』、『太平御覽』、『太平廣記』、『太平寰宇記』、『輿地廣記』等に引用されている。なお、輯本としては、『說郛』、『五朝小說』、清任兆麟（『心齊十種』所收）、清王仁俊（『玉函山房輯佚書補編』所收）がある。

② このほかに、二點間の距離をあらわすものとしては、『太平御覽』卷六九所引『荆州圖經』に

襄陽縣南八里峴山東南一里江中有蔡洲。漢長水校尉蔡瑁所居。宗族強盛、共保蔡洲

とある。

③ もちろん、襄陽城内にも豪族が在居していたことはまちがいないが、詳細を明らかにすることはできない。前漢時代は人々は城内に住居しているのが原則である。豪族は城内の住民がそれぞれ城外周邊に所有している耕地をしだいに集積兼併して成立したものであり、したがって豪族も城内に居住していることになる（兼併型豪族）。前漢末期以降になると、この兼併型豪族のほかに、郊外に本據を置き、宗族全體が共同で開發した耕地を一圓的に所有するタイプが出現する（開發型豪族）。襄陽の龐氏、楊氏、蔡氏、習氏はこの開發型豪族に屬し、かれらの聚居はいわゆる「ムラ」の原初的型態にほかならない。

④ 『隸續』卷十二、劉寬碑陰門生名に、

漢壽長南郡襄陽龐韙漢光五百

とある。この龐韙なる人物は白沙曲の龐氏の一員と推定される。

⑤⑥ 『蜀志』卷七、龐統傳注所引『襄陽記』に、

〔龐〕德公子山民、亦有令名、娶諸葛孔明小姊、爲魏黃門吏部郎、早卒。子渙、字世文、晉太康中爲牂牁太守

とある。

⑦ 『太平御覽』卷四〇三所引『襄陽耆舊記』に、

龐德公子奐字世文、晉太康中爲牂牁太守。去官歸鄉里、居荆南白沙。鄉里人宗敬之、相語曰、我家池中龍種來。里中化其德。少壯皆代老者擔

とある。

⑧ 『蜀志』卷七、龐統傳に、

〔龐〕統子宏、字巨師、剛簡有臧否。輕傲尚書令陳祗、爲祗所抑、卒於涪陵太守

とある。

⑨ 〔龐〕統弟林、以荆州治中從事參鎭北將軍黃權征吳。値軍敗、隨權入魏。魏封列侯、至鉅鹿太守（『蜀志』卷七、龐統傳）

〔龐〕林婦、同郡習禎妹（『蜀志』卷七、龐統傳注所引『襄

陽記』)。

⑩ 〔楊〕儀兄慮、字威方。少有德行、爲江南冠冕。州郡禮召、諸公辟請、皆不能屈。年十七夭、鄉人號曰德行楊君(『蜀志』卷十、楊儀傳注所引『楚國先賢傳』)。

⑪ 楊顒字子昭、楊儀宗人也。入蜀、爲巴郡太守・丞相諸葛亮主簿。(中略)後爲東曹屬典選擧。顒死、亮垂泣三日(『蜀志』卷十五、楊戲傳注所引『襄陽記』)。

⑫ 黃承彥者、高爽開列、爲沔南名士、謂諸葛孔明曰、聞君擇婦、身有醜女、黃頭黑色而才堪相配。孔明許、卽載送之。時人以爲笑樂、鄉里爲之諺曰、莫作孔明擇婦、正得阿承醜女(『蜀志』卷五、諸葛亮傳注所引『襄陽記』)。

⑬ 詳しくは、第四章を參照。

⑭ このように宗族內部に貧富の差が認められる事例はすでに陳留郡圉縣の高氏の場合について證明した(拙稿「巴蜀の豪族と國家權力—陳壽とその祖先たちを中心に—『東洋史研究』二十五卷四號)。さらにかかる事例を紹介したい。涿郡安定縣の名族である崔瑗は「居常蔬食菜羹而已、家無擔石儲、當世淸之」(『後漢書』列傳第四十二、崔瑗傳)とされ、その子の崔寔も父の葬儀に資產を使い果たし、任官以前は酤釀の販賣によって生計を立てた。かれが死亡した時には、家中のものは十分な葬儀もおこなえず、楊賜・袁逢・段熲などの友人が葬具を調達してやったのである。ところが、崔寔の從兄にあたる崔烈は富裕であり、靈帝光和元年の賣官の際には、錢五百萬を前拂いして司徒の官位を得ている。また「五世三公」の名族である汝南汝陽の袁氏は「袁氏貴寵於世、富奢甚、不與它公族同」とあるが、その一族の袁閎は「居處仄陋、以耕學爲業。從父逢・隗並貴盛、數饋之、無所受」とある。この袁閎の行爲はきわめて意圖的である。

⑮ 拙稿「貴族的官制の形成—淸官の由來とその性格」(『中國中世史研究—六朝隋唐の社會と文化—』所收)

⑯ 『魏志』卷六、劉表傳注所引『司馬彪戰略』。

⑰ 『世說新語』言語編注所引『司馬徽別傳』。

⑱ かれが古文派の學者であったらしいことは、『蜀志』卷十二、尹默傳に、

尹默字思潛、梓潼涪人也。益部多貴今文而不崇章句。〔尹〕默知其不博、乃遠游荆州、從司馬德操・宋仲子等受古學

と見えている。

⑲ 諸葛孔明爲臥龍、龐士元爲鳳雛、司馬德操爲水鏡、皆龐德公語也(『蜀志』卷七、龐統傳注所引『襄陽記』)。

⑳ 劉備が諸葛孔明を知ったのも、この司馬徽(德操)の仲介によっている。すなわち、『蜀志』卷五、諸葛亮傳注所引『襄陽記』に、

劉備訪世事於司馬德操。德操曰、儒生俗士、豈識時務。識時務者在乎俊傑。此間自有伏龍、鳳雛。備問爲誰、曰、諸葛孔明、龐士元也

とある。

㉑ 後漢書列傳第五四、趙岐傳に、

興平元年、詔書徵(趙)岐。會帝當還洛陽、先遣衞將軍董承修理宮室。岐謂承曰、今海內分崩、唯有荆州境廣地勝、西通巴蜀、南當交阯、年穀獨登、兵人差全。岐雖迫大命、猶志報

國家、欲自乘牛車、南說劉表、可使其身自將兵來衞朝廷、與將軍并心同力、共奬王室。此安上救人之策也。承卽表遣岐使荆州、督租糧。岐至。劉表卽遣兵詣洛陽、助修宮室、軍資委輸、前後不絕

とある。

㉒『魏志』巻二十一、衞覬傳に、

〔衞〕覬書與荀彧曰、關中膏腴之地、頃遭荒亂、人民流入荆州者十萬餘家、聞本土安寧、皆企望思歸

とある。

㉓このほかに、一時にせよ荆州に寄留していた人物としては、宋忠（南陽出身）、司馬芝（河內溫）、杜夔（河南）、孟曜（出身地不明）、傅選（出身地不明）、杜畿（京兆杜陵）、邯鄲淳（潁川）、諸葛亮（琅邪陽都）、崔州平（博陵？）、徐庶（潁川）、李譔（梓潼涪）、尹默（梓潼涪）、劉巴（零陵烝陽）などが擧げられる。

㉔『吳志』巻九、周瑜傳に、

其年九月、曹公入荆州、劉琮舉衆降、曹公得其水軍、船步兵數十萬、將士聞之皆恐。（孫）權延見羣下、問以計策。議者咸曰、曹公豺虎也、然託名漢相、挾天子以征四方、動以朝廷爲辭、今日拒之、事更不順。且將軍大勢、可以拒（曹）操者長江也。今操得荆州、奄有其地、劉表治水軍、蒙衝鬪艦、乃以千數、（曹）操悉浮以沿江、兼有步兵、水陸俱下、此爲長江之險、已與我共之矣。而勢力衆寡、又不可論。愚謂大計不如迎之

とあるのによる。

㉕『晉書』巻八二、習鑿齒傳。

㉖「與釋道安傳」（『弘明集』巻十二）

㉗『世說新語』忿狷篇。

〔附記〕　水經注沔水編の解釋に關しては森鹿三博士を班長とする水經注疏研究班の諸氏より種々の御教示を得た。ここに記して謝意を表したい。